

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	青年期以降に広汎性発達障害と知ることによる心理的 影響と変化—主観的体験の質的分析—
Author(s) 著 者	藤永,昭子
Degree number 学位記番号	第 59 号
Degree name 学位の種別	修士(作業療法学)
Issue Date 学位取得年月日	2014-03-31
Original Article 原著論文	
Doc URL	
DOI	
Resource Version	

修士論文の内容の要旨

保健医療学研究科 博士課程前期 理学療法学・作業療法学 専攻 精神障害リハビリテーション学領域分野

学籍番号 12MO11 氏 名 藤永 昭子

論文題名 (日本語)

青年期以降に広汎性発達障害と知ることによる心理的影響と変化 一主観的体験の質的分析—

論文題名 (英語)

Psychological Affect and Changes by Perceiving
Pervasive Developmental Disorder in Adulthood
—Qualitative Analysis of Subjective Experience—

《要旨》

はじめに

広汎性発達障害(PDD)とは相互的な社会コミュニケーションおよび、常同 的で反復的な関心活動に特徴づけられ、一生涯にわたり持続する障害である. PDD の下位概念として自閉症、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害 があり、小児期に診断されやすいといわれている、しかし、小児期において診 断されなかった者は青年期以降に PDD 特性によって日常生活で支障をきたし、 気分障害・不安障害などの二次障害に罹患しやすいといわれている. その結果、 精神科へ受診し、自身が PDD であると初めて知る可能性が高いといわれてい る. 青年期に PDD と診断された者は小児期に診断された者に比べ、二次障害の 悪化や特性に適した仕事に就くことが困難であると問題視されている。また彼 らに対し、有効な支援が確立されておらず、福祉が充実していないのが現状で ある. しかし, 先行研究によると, 青年期以降に PDD と知った者の中には, 今 まで困難であったことの原因が解決し自己理解が促進する、当事者とのネット ワークに繋がりやすい、という肯定的な変化がみられる一方、将来に絶望する、 障害者とのレッテルを貼られる、という否定的な側面も指摘されている. この ように青年期以降に PDD の診断の影響についての指摘が存在するものの、具体 的な心理的プロセスについては明らかになってない、そのため、本研究では青 年期以降に PDD であると知った者の心理的プロセスを明らかにし、彼らへの有 効な支援の示唆を得ることを目的とする.

方法

対象者は地域で公開されている自助グループに参加する者 9 名とした. 18 歳以降に自閉症,アスペルガー障害,特定不能の広汎性発達障害の診断を受け,2 年以上経過した者を対象とした.対象者には PDD であると知ることによる心理的変化に焦点を当てて,インタビュー調査を行った.インタビュー時はインタビューガイドを使用し,PDD であると知る前後の主観的体験について半構造化面接を行った.インタビューデータは録音し,修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った.

結果

インタビューの分析により、PDDであると知ることによる心理的プロセスに 関連する 36 個の概念、9 個のカテゴリー[障害特性が引き起こす事柄] [特性理解 のない周囲からの働きかけ] [障害疑念と探索] [広汎性発達障害と知ることによ る心理的反応] [障害を含む自己像への転換] [障害受容要因としての支援者] [適 応阻害因子としての環境] [肯定的自己像の発達] [継続する障害特性問題]を生成 した.

考察

上述した結果を参考に青年期以降に PDD と知ることによる心理的プロセスの関連性を考察によって、3つの視点からリハビリテーション支援について検討した。まず、障害への疑念を持つ当事者に対し、早期診断への介入が必要である。診断名が下されるまで時間がかることにより二次障害の悪化が懸念されるため、早期介入に向けての介入が必要である。第二に、当事者同士の相互作用の促進が必要である。診断後、自助グループへ参加により肯定的自己像を発達させやすいことが明らかであり、作用を促進する介入が必要である。一方で、運営がうまくいってないグループや障害特性に合わないグループに参加することで不利益を被ることがあり、改善していく必要がある。第三に、継続障害特性問題への対処である。障害特性の完治は困難であるため、周囲の者への障害理解を促す介入が必要であると考えられる。

キーワード

広汎性発達障害(Perceiving pervasive developmental disorder), 青年期 (Adulthood), 主観的体験(Subjective experience), 質的研究(Qualitative Analysis)

$\langle Abstract \rangle$

Background

Pervasive developmental disorder (PDD) is an impairment of social interactions involving permanent restricted, repetitive, and stereotyped behavior, interests, and activities. PDD, which covers a spectrum of diseases including Autism, Asperger disorder and Pervasive Developmental Disorder Not Otherwise Specified (PDD-NOS), is usually diagnosed in childhood. However, people not diagnosed in childhood struggle in their lives with secondary difficulties such as mood and anxiety disorders. Therefore, they recognize themselves as PDD for the first time when they see psychiatrists. People diagnosed with PDD in adulthood tend to suffer secondary difficulties and struggle to maintain jobs in comparison with those diagnosed with PDD in childhood. Moreover, beneficial support and welfare is often insufficient. However, according to prior research, the psychological effects and changes are increased when PDD is identified in adulthood. They showed that the positive effects of the perception of PDD in adulthood are increased self-understanding, which aids the solution of factors previously known to cause difficulties, and the promotion of personal support networks. However, the studies also showed the negative effects to be a feeling of hopelessness with regard to the future and labeling by society as handicapped. In this way, they indicate the psychological effects and changes of perceiving PDD in adulthood. However, the psychological process underlying these affect is not revealed in detail. Therefore, in this study, I focus on the psychological process underlying the effects associated with the perception of PDD in adulthood and I will demonstrate useful approaches with which to deal with adult PDD

Methods

Nine participants in a self-help group were chosen. All had been diagnosed with adult PDD over 2 years previously. They were interviewed about the psychological effects and changes associated with discovering they had PDD. Each participant underwent a semi-structured interview based on an interview guide. The interview data were recorded and analyzed using a modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

Result

From the M-GTA based analysis, we identified 36 concepts in the following 9 categories: [Circumstances leading to PDD], [Pressure from those not

recognizing PDD], [Doubt and searches related to PDD], [Psychological effects of perceiving PDD], [Opportunity to identify PDD], [Factor in the acceptance of PDD by supporters], [Environmental factor inhibiting adaptation], [Development of a positive self-image], [Continuing issues related to PDD].

Discussion

We discussed the connections between these categories and three rehabilitation approaches. First, it appears that supporters have to intervene quickly when patients are having doubts about PDD to prevent aggravation of secondary difficulties. Secondly, supporters have to help people with PDD communicate and interact within self-help groups as these groups aid in the development of positive self-image. On the other hand, supporters have to improve group administration and the adaption of the group to fit participants, as participation in a poorly administered group can exacerbate a patient's condition. Lastly, supporters have to intervene in the case of continuing issues associated with PDD. Supporters have to help people around them deepen their understanding of PDD as complete recovery from PDD is difficult.

論文審査の要旨及び担当者

報告番号 第**59** 号 氏 名 藤永 昭子

論文審查担 当者 主 查:作業療法学第二講座教授 池田 望副主查:看護学第三講座教授 吉野 淳一副主查:作業療法学第二講座教授 松山清治

論文名

青年期以降に広汎性発達障害と知ることによる心理的影響と変化 一主観的体験の質的分析—

Psychological Affect and Changes by Perceiving Pervasive Developmental
Disorder in Adulthood

-Qualitative Analysis of Subjective Experience-

広汎性発達障害(PDD)を持つ者では二次的精神障害の罹患が多い一方、PDDと知った後に肯定的な自己像を持ち、良好な社会適応を示す者も存在する。本論文はこれを踏まえ、PDD者が障害を認識する前後の心理的プロセスを明らかにし、彼らへの有効な支援の示唆を得ることを目的としたものである。調査対象者は地域生活を送る PDD 者9名であり、インタビュー調査により得られた発話データについて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、心理的プロセスに関連する36個の概念、9個のカテゴリーが得られ、概念、カテゴリー相互の関連から、早期診断・介入の必要性、当事者同士の相互作用による肯定的自己像の発達、継続する障害特性問題への介入必要性が示された。

審査委員会では、調査対象者に関する説明および理論的サンプリングの説明に関する詳細を追記すること、結果図、論文構成をより簡潔に示すこと、その他文章表現に関して指摘した。その後修正内容を確認した結果、審査による指摘に対する修正は妥当であること、本研究により得られた知見は精神障害リハビリテーションの発展に貢献し得ると認められることから、修士(作業療法学)に相当すると最終的に判断した。